

五匹の子豚

FIVE LITTLE PIGS

2003年作品

製作: マーガレット・ミッチェル

監督: ポール・アンウィン

脚本: ケビン・エリオット

日本語版プロデューサー: 里口 千

日本語版演出: 藤南 勝之

日本語版翻訳: 宇津木 道子

出演:

エルキュール・ポワロ … デビッド・スーシェ/熊倉 一雄

※ ※ ※

キャロライン・クレイル … レイチェル・スターリング/萩尾 みどり

アミアス・クレイル … エイダン・ギレン/松橋 登

フィリップ・ブレイク … トビー・ステューブンス/山路 和弘

メレディス・ブレイク … マーク・ウォーレン/牛山 茂

ルーシー・クレイル … エイミー・マリンズ/小林 さやか

エルサ・グリヤー … ジュリー・コックス/深見 梨加

ミス・ウィリアムズ … ジェマ・ジョーンズ/八木 昌子

アンジェラ・ウォーレン … ソフィー・ウインクルマン/佐々木 優子

ディプリーチ … パトリック・マラハイド/小林 尚臣



© Agatha Christie Ltd (a Chorion Company)
2003

ルーシー・クレイルの母親は、画家である夫を殺した罪で死刑に処されていた。しかし彼女は、娘に自らの無実を告げる手紙を遺しており、その言葉を信じてルーシーは、真相の解明をポワロに託す。彼女の切なる依頼を請けたポワロは、14年前に起きた事件の関係者である両親の親友や幼馴染、愛人、クレイル家の家庭教師、そしてキャロラインの異父妹アンジェラを訪ね、5人それぞれが語る当時の様子から事件の真相に辿りつく。

◆一大転換点

本話を以ってシリーズは、これまでの49話分を前半、以降の21話分を後半と呼称してもいいほどの一大転換を迎えます。後半シリーズ最大の特徴は、ポワロを除くヘイスティングス、ジャップ、レモンのレギュラー3人が登場しなくなる。そして、この作品の最大の魅力のひとつであるユーモア描写が極端に減り、ドラマの語り口はこれまでと比べてぐっと暗いトーンになります。

どちらの変節も、これまでの諸作を満喫したファンには寂しい限りでしょうが、ブライアン・イーストマンと交代し、本話から製作の任に就いたマーガレット・ミッチェルの狙いは、ユーモアの代わりに、ポワロをはじめとする登場人間の本质を一層、掘り下げたいということのようです。本話以降、しばしば描かれるシリアスな叙情をたたえた構図と、ひとり晩年へと向かうポワロの孤独な姿は、前半シリーズにはついぞ描かれなかった描写です。

◆時の狭間を漂うように

本話は、狡猾な殺人と運命の皮肉が織り成した悲劇を、多角的な視点と移ろう時の郷愁の内に、情感豊かに描いています。主人公ルーシーは長き時を乗り越え、両親の死の真実を得ようとポワロを頼り、その願いを受け入れた彼は、関係者5人を訪ね歩くことで、過去の真実へと至ります。見所は“子豚”たちの14年を隔てる演じ分けと、その時間を飛び越えて揺れる悲しいノスタルジー。そして、まるで時の狭間を漂うように、ステッキ片手に“五匹の子豚”を訪ね歩く寡黙なポワロの描写です。

なおタイトルはおなじみ、マザー・グースの数え唄から採られたもの。5人の容疑者の行動は、詞に唄われる子豚の描写をなぞらえています。

◆名脇役と、もう一人の主演

家庭教師のミス・ウィリアムズに扮し、独身英国婦人の生真面目を巧みに表現しているのは、『ブリジット・ジョーンズの日記』(2001)及びその続編でブリジットの母親、『ハリー・ポッターと秘密の部屋』(2002)他でホグワーツの校医マダム・ポンフリーも演じているヴェテラン女優ジェマ・ジョーンズ。

もう一人の主演とも言べきキャロラインに扮しているのは、『女王陛下の007』(1969)や、文字通り抜群の作品センスでファン人気も高い'60年代ドラマ『おしゃれ(秘)探偵』のヒロイン、エマ・ピール役で知られるダイアナ・リグの娘、レイチェル・スターリングです。